

統治性とは、フランスの思想家ミシェル・フーコー（一九二六―八四）が一九七〇年代末につくった表現で、統治のあり方の意味。だが、ここでの統治という語の定義は少し独特だ。主権者による領土や人の支配、国家機構や組織の運営だけが統治の対象ではない。フーコーの統治性論は「自己と他者の統治」を扱う。

統治の語は、古代では操舵まうだを指した。そこから転じ、あるものを方向づけし、導き、支配すること。船長が船を導くようにして、統治者は国家や都市を導く。しかしこうした発想は、こんにちのものとは異なる。古代人にとって導きの対象は国であり、現在のように人ではない。船の進路の決定と、船に乗っている人の誘導とは別の話だ。

では何が統治の対象を人にしたのか。羊飼いと羊の群れの比喩を用いるキリスト教だ。このモデルでイエスと人びと、聖職者と信徒は結びつき、救済が説かれる。一〇〇頭の群羊を昼夜問わず世話する牧者は、一頭の迷子のために、九九頭を残して探しに出る。マタイ伝に描かれるこうした牧者が、真の聖職者の姿なのだ。司牧しぼくたる聖職者は、全体と個への同時の配慮という困難な課題を担う。かくして統治の担い手、導き手は船長から羊飼いに交代し、その対象は、集団かつ個人としての人となる。西洋に独特な「司牧権力」の図式が、初期近代から現代の統治性を規定する。

この「人の統治」は「真理」と切り離せない。導かれる側は、

統治性 Governmentality

箱田 徹 はこだ てる 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員

統治の根源

人間学の
キーワード

己についてほんとうのことを語り、知り、認めることで統治されるからだ。キリスト教の告解こっかい（懺悔ざんげ）は、導かれる側に真理を語るよう促し、初期精神医学は、暴力や珍妙な手法を用いて、現実という真理を「患者」に認めよと強いる。ここにもあらわれる、ほんとう＝真理を媒介とした導き導かれる関係、フーコーはこれを統治の構図とする。

近代国家の統治についても、市場を真理の場と見なして同じことがいえる。凶作で穀物価格が高騰すれば論争が起きる。食糧危機は、政権の崩壊や社会の混乱を招きかねないからだ。市場に介入して価格を公正な水準に導くべきか、放置して自然な水準への収束を待つべきか。介入と放任というふたつの立場は、価格が真の水準に至るべしと考える点で同じだ。だがその水準を決めるのが、市場に外的な価値基準か、市場に内在する調整機能かでは異なる。国家の自己統治は、市場と真理との関係性と切り離せない。

統治性論は、分析対象の規模にとらわれず、統治の構図を用いる。集団や個人間のミクロな権力関係も、国家や社会のマクロな権力関係も、自己と他者の統治という同じフレームで考えるのだ。興味深いことに、フーコーの議論は、西洋古代哲学と近代社会を往復し、現代資本主義論にもおよんだ。統治の問いが元の意味で扱われた時代に遡り、その変遷を現代まで追う統治性論では、現在の統治性の分析と、その反転可能性とが同時に模索されていたのである。